



TITLE:

琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の文法(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

白田, 理人

CITATION:

白田, 理人. 琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の文法. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19433>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	白田理人
論文題目	琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の文法		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、琉球奄美喜界島上嘉鉄方言（以下上嘉鉄方言）を対象とし、フィールドワークで得たデータに基づいて音韻論／形態論／統語論的記述を行った記述文法である。喜界島の方言についてはこれまで多くの研究があるが、多くのものが音韻、活用など方言の一部を取り扱ったものがほとんどで、唯一まとまったものとしては、語彙集があるのみである。一方言を体系的に記述したものは本論文が最初のものといえることができる。</p> <p>本文は全12章からなる。第1章は導入である。喜界島方言の概要として、地理と系統、話者数・危機の度合い、先行研究・資料について述べ、本論文で扱うデータと記述の方法論的基盤について示している。第2章から第11章までが記述文法である。</p> <p>第2章では、音韻論の記述として、音素と異音、音節構造と音素配列論、アクセント・イントネーション、（形態）音韻論的交替、借用語の音韻的特徴、複合語の音韻的特徴、本論文で用いる表記を示している。音韻論に関しては基本的に構造主義言語学の音素論を用い、音素とその異音、異音の実現規則を明示する。母音音素に関して特筆すべきは形態音韻論的交替及びアクセント付与を根拠に長母音を短母音の連続ではなく、音素として設定していることである。子音音素としては/p/, /b/, /t/, /tʰ/, /d/, /k/, /kʰ/, /g/, /t͡ɕ/, /d͡ʒ/, /s/, /h/, /m/, /n/, /ɲ/, /r/, /w/, /j/を認めるが、このうち/s/, /h/, /w/は母音/i/及び/i:/に先行する場合口蓋化した異音として実現する。音節構造は(C)V(C)であり、母音／コーダ子音は1モーラ、長母音は2モーラにカウントされる。本来語では三モーラ以上の超重音節は許容されない。アクセントについては、形態素ごとにアクセントの有無が指定されている二型体系であり、一音韻語の中にアクセントの要素があればそれに、なければ語末にHLH*のメロディが結びつくとして分析している。音調を担う単位は有声のモーラ、アクセントを担う単位は母音モーラである。イントネーションとして、疑問文末以外にはLが現れる。形態音韻論的な交替として、超重音節などの有標な構造を避けるための母音挿入／子音削除／短母音化などを認めている。</p> <p>第3章では、形態論・統語論の概要として、句の構造（動詞述語／名詞述語／形容詞述語／名詞句）、品詞分類、語、接語と接辞の区別、文法関係、語順と格配列の類型、形態法の概観を示している。動詞述語は主動詞と随意的な補部及び補助動詞からなる。名詞述語は名詞句に随意的にコピュラが後続する。形容詞述語は、形容詞単独またはこれに状態動詞 <i>ar-</i>またはコピュラが後続した構造を持つ。名詞句は主要部名</p>			

詞と随意的な修飾部から成る。主要な品詞として名詞・動詞・形容詞A・形容詞B・連体詞を認めている。語順はSV/AOV、修飾部—被修飾部であり、主格対格型の格配列を示す。形態法として、接尾辞添加、複合に加え、一部の形式には重複及び長母音化が認められる。

第4章では、名詞形態論として、名詞の構造と名詞接辞、複合名詞について述べ、閉じたカテゴリである人称代名詞、指示詞、疑問詞と、呼称詞を扱っている。名詞語幹は自立形式であり、随意的に複数接辞／指小辞が後接し、両方が後接する場合は指小辞が先行する。また複数接辞／指小辞の後接及び名詞どうしの複合において介在する連結辞を認めている。人称代名詞は、一人称において除外 (*wannaa*)／包括 (*wa(a)čaa*, *wattari*) の対立を示し、また包括形は双数 (*wattari*) と複数 (*wa(a)čaa*) の区別を持つ。一人称単数／二人称単数のみ独自の所有形を持つ。呼称詞は親族呼称・職階呼称・親愛／軽卑呼称が含まれ、複数接辞-*taa*と共起する点、属格助詞を伴わずに名詞修飾できる点で他の普通名詞と形態統語的に異なることから、名詞のサブカテゴリとして設定されている。

第5章では、動詞形態論として、動詞語幹分類、形態音韻論的交替、屈折形態論、派生形態論、複合について述べられている。動詞語幹は非過去接辞の異形態のうち-*ii*と-*i*のいずれが後接するかによってタイプI／タイプIIの二つに分けられている。クラスIIには存在動詞とこれに由来する形式が含まれる。動詞語幹と接辞の境界では、他の形態素境界には見られない複雑な形態音韻論的交替（子音の同化、異化、削除）が起こる。動詞は主文の主動詞を成す定動詞と、名詞修飾節を成す連体動詞、後続する節及び動詞を副詞的に修飾する副動詞に分類される。定動詞は極性（否定）、法（直説法／命令法／意志法／推量法など）、テンス（非過去／過去）に応じて語形変化する。定動詞の構造は、語幹—否定—テンスまたはムードの構造を成すものと、テンスのあとにさらに接辞（主にムード接辞）が後接する構造を成すもの二種類がある。連体動詞はテンス接辞のあとに連体接辞が後接して作られる。副動詞は、語幹に副動詞接辞（継起／目的など）が後接して作られる。派生接辞として、ボイス、受身、可能、尊敬、アスペクト／証拠性を表すものが示されている。

第6章では、形容詞形態論を扱う。上嘉鉄方言の形容詞については、形容語根クラスに属する語根から、基本的に接辞付与によって二種の形容詞（形容詞A及び形容詞B）が形成されると分析している。この章では形容語根の定義と形態統語的振る舞いについて述べたのち、形容詞の品詞分類について帰納的に議論し、これらを踏まえ、形容詞A／形容詞Bの形態論及び形容詞の複合について記述している。形容詞Aは、形容語根に接辞-*sa(r-)*が後接した形式で、随意的に状態動詞*ar-*を伴って述語を成す。一方、形容詞Bは随意的に状態動詞またはコピュラを伴って述語を成す。形容詞Aは、動詞と語形変化の多くを共有するが、一部接辞の欠如、意味の異なりや独自の語形が見られる。形容詞Bは、形容語根または動詞の非過去連体形に接辞-*ku*が後接して作られる。k

hači「よりよい」は接辞の後接なしに形容詞Bの語幹となる。

第7章では、品詞転換として、動詞、形容語根、形容詞Aから名詞への品詞転換、名詞、形容語根から連体詞への品詞転換、形容詞Aから動詞への品詞転換、動詞から形容詞Aへの品詞転換、形容語根から副詞への品詞転換について述べている。

第8章では、名詞句の特徴として、修飾部と主要部、格について述べている。名詞句の修飾部には、連体詞、名詞+属格助詞、人称代名詞の所有形、連体節、連体節+引用助詞が現れる。また、呼称詞およびその複数形と、人称代名詞及び親族名称の複数形は助詞を介さず名詞修飾部となる。主要部名詞には、格助詞、接続助詞または文末助詞に近い機能を持つ形式名詞も見られる。格助詞として、主格助詞、属格助詞、与処格助詞、処格助詞、具格助詞、方向格助詞、奪格助詞、限界格助詞などを認めている。

第9章は述語句を扱い、動詞述語句／名詞述語句／形容詞述語句の特徴を述べている。動詞述語句は主動詞と随意的な補部及び補助動詞からなるが、このうち補助動詞としては、アスペクトを表すもの（継続*ur-*、完了*ar-*など）、受益を表すものがある。補部をとる動詞としては、軽動詞*s(i)-*「～する」と*nar-*「なる」がある。名詞述語は、動詞接辞によって極性／テンス／ムード／待遇などを標示する場合、コンピュータがホストとなってこれに接辞が後接する。以上のような動詞接辞が必要でない場合、モダリティや疑問を表す文末助詞の多くは主要部名詞に（コンピュータを介さず）後続し、コンピュータとは共起しない。形容詞述語については、形容詞Aは屈折形*sar-*の場合単独で述語をなし、基本形*-sa*は単独または状態動詞*ar-*を伴って述語を成す。形容詞Bは単独または状態動詞*ar-*を伴って述語を成すほか、コンピュータ／文末助詞が直後に後続し、名詞述語に準じた振る舞いを示す。

第10章は、単文に関わる特徴として、基本的な構造、文末助詞、文タイプ、否定、テンス／ムード／アスペクト、ボイス、取り立て、分裂文について述べている。文末助詞の下位区分として、統語的な振る舞いの違いから文末助詞Aと文末助詞Bの二つを認めている。文末助詞Aは先行する形式の制限が強く、その他の文末助詞及びコンピュータの基本形と共起しない。一方文末助詞Bは、文末助詞Aやコンピュータの基本形と共起し、また種々の活用形に後続しうる。文タイプは、屈折または文末助詞の添加によって示される。否定は、動詞述語は否定接辞で、名詞述語はコンピュータの否定形で、形容詞述語は状態動詞*ar-*の否定形で標示される。テンス／ムード／アスペクトは接辞、補助動詞によって標示される。取り立て助詞として主題助詞*a*、焦点助詞*du*、添加助詞*mu*などを認めている。

第11章は、複文の特徴として、副詞節、引用節、連体節について、これらを標示する助詞とその分布、節の統語的機能について論じている。

第12章では、形態素ごとのグロスと日本語訳つきの自然談話資料を提示している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、琉球奄美喜界島上嘉鉄方言の記述文法的研究である。琉球諸語は相互理解性を欠く5つの言語群からなり、そのすべてが若い世代への言語継承が行われておらず、消滅の危機に瀕している。琉球諸語は沖縄本島と宮古島の間を境として大きく南北に分けられ、喜界島方言は北部グループに分類される。記述言語学的視点で一つの方言を網羅的、体系的に記述したものは、北部グループでは新永悠人の奄美大島湯湾方言もののみであり、本論文は二つめの記述文法になる。論者は2010年9月から6年に渡ってこの方言の調査を行っている。本論文のデータはすべて論者（及び共同研究者と）の現地調査に基づく一次資料である。

本論文は全12章からなる。第1章は導入として喜界島方言の琉球諸語内での位置付けに関する議論を示し、また上嘉鉄方言の特色について述べ、また言語の使用状況について示している。第2章から第11章が記述文法であり、第12章が自然談話資料となっている。

第2章では、音韻論的体系の記述が行われている。音素の設定にあたっては、長母音を短母音音素の連続と解釈せず、長母音音素を設定すべきであることを形態音韻論的交替とアクセントの点から議論している。主題助詞とホストの形態素境界に起こる交替について、ホストが長母音の場合と、ホストの末尾に短母音の形態素が後接している場合では、異なった交替現象が見られることが示されている。また閉音節において、長母音と短母音の連続ではアクセント付与が異なり、両者を区別する必要があることが示されている。また、アクセント体系・実現パターンの記述・分析にあたっては、自律分節音韻論にもとづく枠組みを用いることで、語末が上昇するパターンと語中で上昇が起きるパターンをHLH*のメロディ付与として統一的に説明している。さらに、接辞／接語の違いによるアクセントの異なりも、語幹の場合共通して、有アクセントか無アクセントという一つの語彙的指定によってパターンの記述に成功している。

第3章では、形態論・統語論の概要が示されている。品詞分類においては、形態統語的な基準により、主な品詞として名詞・動詞・連体詞に加え、二つの形容詞（形容詞Aと形容詞B）が設定している。琉球諸語の形容詞は、「サアリ」形と「クアリ」形という二つの語形のパターンがあり、どちらか一方を持つ方言が多いことが指摘されているが、上嘉鉄方言はこの両方を持っており、論者は両者の違いからこれら二つの形容詞を設定するという注目すべき記述を行っている。

第4章から第7章は形態論的な記述であり、それぞれ名詞形態論、動詞形態論、形容詞形態論、品詞転換を扱っている。第4章では名詞のサブカテゴリとして呼称詞が設けられ、これがその他の一般名詞と異なる形態統語的ふるまいを示すことが記述されている。第5章の動詞形態論では、生成音韻論的枠組みを用いることで、動詞語幹と接辞の形態素境界に生じる複雑な交替に対し、弁別素性を用いて規則による説明を与えて

いる。第6章の形容詞では、形容詞の品詞分類を帰納的に論じ、形容詞A、形容詞Bと動詞、名詞の形態統語的ふるまいの異なりを実証的に示している。

第8章から第11章は統語論的記述であり、それぞれ名詞句、述語句、単文、複文を扱っている。第8章では名詞句の記述として、修飾部と主要部、格について述べており、多様な形式名詞と格助詞の形式と機能の記述が含まれている。第9章は述語句の記述として動詞述語句／名詞述語句／形容詞述語句の特徴が述べられており、その一部として補助動詞の形式と機能が記述されている。第10章は、単文の構造、文タイプ、否定、テンス・ムード・アスペクトなどを扱っている。特筆すべき点として、統語的な振る舞いを基準として文末助詞を二つに大別し、文末助詞Aと文末助詞Bの下位区分を設けていることがある。文末助詞Aは先行する要素の制限が強く、いわば動詞の屈折の一部として扱ってもよいものである。これに対し、文末助詞Bは文末助詞Aを含むさまざまな要素を先行要素として取る。

第12章では、上嘉鉄方言話者2名による自然談話を、形態素境界を付した音素表記、形態素ごとのグロス、日本語対訳を示しており、危機言語である上嘉鉄方言の貴重な言語資料となっている。

以上述べたように、本論文は北琉球の言語に対してなされた体系的な記述文法として非常に質の高いものであり、琉球諸語の研究を一步進めたものと評価できる。北琉球の記述文法の最初のものである新永の論文は英文で書かれており、話者が利用できる参照文法としては日本語で書かれた論者のものが初めてである点も価値が高いといえる。しかし、いくつか問題もある。まず、簡潔な記述を心がけたためか、複雑な動詞の形態論を膨大な数の表を用いて説明した結果、非常に読みにくいものとなっている。この点はこのような消滅危機言語の参照文法としての役割を果たさなければならない記述文法としては価値を減じていると判断される。また、記述に粗密があり、テンス・アスペクト・モダリティに関する記述は簡潔すぎるであろう。しかし、これらは論者が将来解決できる問題であり、本論文の価値を大きく損ねるものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成28年2月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。